

大丈夫よ！ お母さん！

vol.25

教育コーディネーター 中西美沙子



(今回のテーマ)

「しなやかに、 風土を生きる」

神話「古事記」には日本の国の成りたちが描かれています。不思議なことに大地が漂うように表現されています。それは神話の時代にも「地震」が始終、起こっていたことを示しています。

「海水に浮き沈み」している国が、私たちの住む日本なのです。天災は忘れた頃にやってくると言われますが、そのくらい人は、過去に起きた災いを忘れやすいものですね。

3・11が人の体と心を壊した記憶は、今も新たなです。

「防災」と聞くと、震災時の「風評被害」のことを思い出します。人は弱い生き物です。ですから、自分の命を守るように「水」や「食糧」を過剰に得ようとしません。

災いを防ぐということは、シミュレーションやインフラだけで、できるものではないでしょう。人への配慮がなくては、本当の「防災」にはなりえないのでは。

「防災」で真っ先に思い浮かぶのは、子どもたちのことです。私にも2人の娘がいます。

娘たちが幼い頃は「地震がきたらどのように対処するか」を、「子どもを守ることを中心に考えていました。」

3日間生きられるための準備や、逃げる場所。子どもたちに防災グッズを見せながら話したことも、思い出されます。「いい？ 小学校の『ごりんの山』で待っててね。必ず迎えに行くから」。家族が別々の場にいた時災害が起こったら、という想定です。

たとえ道が寸断されたとしても、お父さんもお母さんも歩いてその場所に行く。何日かかっても、それが家族の約束でした。その意識のどれもが、子どもの命とつながっていました。楽しいことと同じように、地震などマイナスなことを引き受けることもまた、親子の関係を育むものです。どんなに防災をしても、災いはやってき

ます。それぞれのエキスパート、行政や医療との信頼関係が、災いを最小限に食い止める力になるでしょう。防災とは「人と人とのつながり」と言い換えることもできます。災いから命を守ることに核になるのは、他人との融和である、という意味です。

世界的に有名な建築家の隈研吾（くまげんご）さん。彼は東北復興のプロジェクトを求められました。「住む場所をどのようにするか」が、彼の課題です。今まで住んでいた海辺を捨てて高台に住む、という案が行政から出されました。しかし彼は、「逃れること」だけに、人が住む意味があるのかと考えています。

どの時代でも人は本能のように「自分の場所」を見つけてきました。漁をするために人は海辺に住みまわりました。でもそのためだけではないものを感じます。それは、海辺の風や潮の匂い、海へと開かれた入り江の形が育んだものたちです。言い換えれば海辺が、その土地が、人を育んできたと言ってもよいでしょう。

この夏起こった山口県の集中豪雨、たくさんリンゴの木が水に流されました。わずかに残った青いリンゴの実を見ながら人々はぼうぜんとしていましたが、その落胆の表情の中に、強い意志のような、小さな輝きが見えました。

「揺れる大地」の中で生きてきた日本人のDNAには、自然に抗する生き方ではない、災害を恐れながら、柳のようにしなやかに生きる力があるのだと思えるのです。



Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索

ピアノシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。

